

序

虐げられた女性の悶えが、私をしてペンをとらしめた原因の一つであった。すべて生きることは苦悩である。苦悩の中に生きて、しかも生活そのものを光たらしめるためには、考えねばならぬ問題が二つある。

一つは無智である。われらの生活が不断に真の人生を創造する光は仏教のいわゆる智慧である。無智なるがゆえに、世の中及び自分に対して、正しいものの見方をしない。正しいものの見方を欠いた時、その生活は行きづまる。不断に正しい教養を受けて自分自身をつちかねばならぬ。

今一つは苦悩の中に立つ力の欠乏である。力の根底は慈愛である。人生に対する熱愛、人に対する熱愛、それにおいて無限に苦悩に働きかける力はない。慈愛の眼を不断につちかうものは宗教的・道徳的教養である。意味から言うとな力の源泉は信念である。

女性も男性よりも愚痴であるという。遺憾ながらそれを否定することはできぬかも知れぬ。けれども、それは断じて女性本来の不可抗的な原因ではなくて、教養の不足であり、過去の社会組織の罪である。女子は外、苦難に堪え、内、煩惱を克服する力に乏しい、しかしながらその自覚と信念によつては、男性と色彩を異にした、女性独特の世界が建設されうることを信ずる。もし女性が真に自覚し、本来の美德を輝かすならば、その影響は男性よりもっと根本的であり、重大である。

この一章は、以上の意味において女性の胸に「微かな何ものかを」と思つて書いたもので、地上の寂しさと苦悩とに血みどろになつてゐる凡人におくる手紙である。

私たちはあまりに負けてはならぬ教育を受けてきた。そしてこの負けじ魂のために自他ともに傷ついてきた。私は、一切人とともに、もつとほんとうの姿にまで下りて、合掌の世界に人間生活を建設することを切念する。この一書は平凡人の合掌の書である。

昭和二年八月三十一日

同情

私は今から「悩める女性の胸に」と題してお話し申します。むつかしい学問をしていなさる学者にお話しするのもありません。得意に生きていなさる御令嬢に捧げるのでもありません。

私は人生という行列の中から、華やかであるべき若い処女や奥様の中に、涙にみちた暗い顔の方をあまりにも多く発見いたします。

看護婦会で働いている方々、紡績工場で働いている方々、奥村で働いている乙女たち、会社やお役所で働いている人たち、下女をしている姉妹、多くの子供をつれて夫に死に別れた不幸な母親、不良な夫や頑固な姑しゅうとめを持つ妻、それがあまりにも私の心を暗くします。

私は昨日もその訴えを聞きました。今日もまた数人の方々の訪問を受けました。私の心はこうした世界に泣く皆様にとらえられてしまいました。今からお話しいたします。

泣いていないで顔をあげなさい。

「先生わたしの心はなぜこんなにも暗いのでしょうか。」今まで一度も会ったことのないあなたが恥すかしそうな中からも、やっとこれだけ口に出してうつむきます。何かたいへんな事情があるにちがいない。

「あなたには御両親がありますか。」

「父はごさいますが母がごさいません。それに家が貧困なので、こうして働いています。」

曇ったその目、あおぎめたその顔、笑いの世界から遠ざかった、あなたの数年間の淋しい、苦しい人生の旅の疲れは、見えすぎるほど見えてきます。

晩春の目ざめるような若葉の間を、折り目さえつかぬような絹物を着流し、今流行の薄物のシヨールを肩に、お姫様のように美しく装った同じ年ごろの処女むすめが、友だちといっしょに公園を散歩しているのをよそに見て、紡績工場に通ってゆくあなたに悲哀がなくてすまぬくらいは知っています。

友のだけかれは女学校を出て、教育もあるりっぱな男子と結婚しているのに、あなたは弟の学資を出しつつ派遣看護婦として過ごす幾年、二十もいつしかすぎて、二十五歳という老嬢になっています。淋しい、暗い、それも無理はない。

私の所には男も女も悩む者しか来てくれない。いったいそれはどうしたのか。でも私も淋しい人間であり、悩み多い人間です。あなたを助けるの救うのということとは、柄にもないことなのです。だけでも、皆様の訴えは、自然に、聞いていた私に何かを言わせるのです。その言った一言葉でも、もしあなたの胸に何かを残したら、私の苦しさも助かります。

自己の存在

同じ地上に同じ人間として生まれてきました。もう一度はつきりと考えなおしてみるので。

過去・現在・未来、三世を通じて、たった一度、私という存在として、他のだれとも違う私として生まれてきているその事実、それについて、もつと明確な意識を持つて下さい。

「何が一番大切ですか？」

「それは私自身です。」

「それはほんとうですか。今一度確かめます。それはほんとうですか。」

それさえはつきりわかるならば、私の言うことはわかるはずです。そうです。金も尊い。家も尊い。学問も尊い。衣服も大切、しかしながら私あってこそ、それらは必要なのです。たとえ一億円の金をくれたからとて、私とかえることはできません。そのいちばん尊い私を、今までそんな考えで一度も見てやらなかったことはありませぬか。

「驚く心」それは人間の心に与えられた尊い神秘であります。何を見てもおどろかぬ人には、一生涯、高い芸術も、尊い宗教も、有益な発明も、何も生まれてはきませぬ。雷を聞いておどろいたり、高い所から落ちておどろいたりするのは馬だつていたします。友が立派な奥様になったのを驚く人はあるでしょう。しかし自分が人間であることに、一度でも驚きの眼を見はった人が何人あろう。あなたはあなたについてまず知らなければなりません。

「私の昔の学級の中に女子が三十人いました。その中で私は成績も身長も中程でした。」

それは学校の帳簿や教室の中のことです。私のいう意味はそれとは違います。あなたという方は全宇宙にいま一人ないのです。過去にも現在にも未来にも外には私はいないので。その私が今までどうなっていたのでしょうか。

ただ、風のまにまに流されてきたのではありますまいか、いいえ、はつきりとした何の考えなしに、あなたの周囲ばかりを見まわして、泣いてきたのではありますまいか。さめたる者は決して自分をわけのわからぬ一つの存在として、わけのわからぬ世界に流されるままにしておくことはできません。それは足のない幽霊だからです。

心の輝き

世の中には持つてる財産の多少で人の値打ちを決める世界もあります。地位さえ高ければ、肩書きさえよければ、尊ぶ世界もあります。はなはだしいのになると衣装のよしあしがものをいう世界もあります。しかし私たちの見ている世界は、そんなものだけでは人の値打ちを定めないのです。職業に高下をつけないのです。

正しい道、人格の光、徳の発揮だけがものをいう世界があるのです。あなたの泣いたのが、そうしたあなたそれ自身よりも、身のまわりに外から附属したもののばかりに眼をそそいでいたためではなかったのですか。

もしそれであるならば、あなたはあまりにも愚かであったのです。私どもは一個の人間を人間として見ます。富んだ人も尊いのです。貧しい人も尊いのです。学者も尊いのです。農夫も尊いのです。靴なおしも尊いのです。大臣も尊いのです。看護婦も尊いのです。医者も尊いのです。その他一切が尊いのです。ただ尊いことにごめた人がないのです。

「あなたの看護会に何人いますか。」

「はい、五十人います。」

「どなたが会の光の中心ですか。」

「そんな者はいません。」

私はそれを聞いた時、悲しまざるを得ませぬ。看護婦であることは決して軽蔑いたしませぬ。ただ、しかし、五十人の会員の中に一人も光の把持者のいないことを悲しみます。なぜ泣いたり、淋しがったりするだけで、もつともつと努力して、道に生き、信仰に輝く人が出てくれないのでしょうか。五十人の娘の中に一人くらいはいてくれてもいい。

もしそれが事実であるならば、あなた方を、どんな幸福な場所の人にしたって何にもならぬのです。私は厳しく、かわいい妹として、その無方針な、なまけた態度を叱ります。あなたの周囲には今日まで、それを叱ってくれる人はなかったのですか。

おお心の光。私のみつめる心の輝き……………。

私がこんな例を引くのも、あなたの「学校教育さえ受けたら……。」と
幻を消したいと思うが故です。人生の幸福は決してそんなものでは決まりません。

苦悩

自分の苦しみがだれにでも一番大きなものに見えます。「私のような不幸な者は、とてもいないだろうと思います。」というのが、苦悩を訴える大部分の人々の言葉です。確かにだれでもそう考えるのです。しかし、それも人間の持つまちがいの一つであります。

つきつめて言うならば、苦しめない人はいないので。

釈尊はこの世の極楽のような、華やかな宮殿の中、多くの人たちが希望する幸福の条件の全部そろった中に立って「人生は苦悩だ！」と叫ばれました。

確かに苦悩です。もし人生は楽しい所だと単純に言ってしまう人があるならば、それは眠っているか、酔っているかであります。ほんとうに人生をじつと見つめた時、確かに人生は苦悩であります。

しかし、もつと深く考えた時、私はこう言ってみたいのです。私たちが生きているということは、ただ楽しかったらいいでしょうか？私には楽しい。私には苦しみが無い。それだけで満足ができるでしょうか。もしそうであるならば狂者がいちばん幸福です。魂が麻酔した者が幸福です。しかし私はそうは思わない。そうです。私はそうは思わない。

狂者となつて笑うより、人間となつて泣け。

見よ！

大聖釈尊は、天上界中の宮殿の中に、人生は苦なりと叫びたまひぬ。

市井の狂者、文化の中に笑う。

酔うて笑うよりは、さめて泣け、

ああ、我はまず人間でありたい。

苦樂以上の問題

私は断じて苦におちいれと言うのではないのです。

私は「樂ばかりを求めるよりも先に、人間でありたいと求めよ。」と言うのです。

私どもが人間であるためには、時には苦をも忍ばねばなりません。

いかに楽しんだかということが、あなたに苦をも忍ばねばなりません。何よりも先に人間として成功したか否かが問題です。

私が光明団をはじめから十五年になります。一日として苦を感じない日はありません。一方には多くの人たちが理解して命まで投げ出して力となって下さるかわりに、一方には厳しい武装をして私や光明団を根こそぎ葬ろうとする方々があります。「苦しい」それが嫌ならば、今日からどこかの事務員にでも使ってもらって、ささやかに暮らしたらいのです。また私は貧しい。いつもお金に困っています。それはあまりにも大家族だからです。それと別れてしまつて、こんな事業をやめてしまえばいいのです。しかし、苦樂の問題よりも、私には私の使命があり、果たさずにはいられぬ理想があります。

あなたが持つている問題は、眼のつけ所がちがうのです。苦樂よりもまず、私はあなたにお問いしたい。あなたはあなたの本願や使命を見出すために、苦しんだことがあるでしょうか。あなたが困っているのは苦樂の問題ではなくて、光が見えぬのです。行くべき道がはつきりしないのです。自分の居所がわからぬのです。それさえわかつた人は、どんな苦惱も超えてゆきます。

私にもし光明団を捨てて、他に私のゆくべき道が見出せたならば、私はまたいかなる苦惱が待つていようとも出てゆかなければなりません。使命や道は苦樂以上であります。

「でも私にはとてもそんな道なんか見あたりません！」

そう言うのでしょうか。それが弊悪卑怯です。天日は万人の上に輝いています。あなたにだけ光への道が閉ざされている理由がありません。今は「永遠の微笑」を持つて、勇士のごとく生き切っている人たちも、かつて一度は皆そう申しました。その心一つだけ打ち破つて、まず強く自信を持つのです。あなたには、あなたよりほかにだれにもまねのできない光があります。牡丹は美しい。しかし道ばたも、野も山も、牡丹だけであつたならば、きつと飽きるに決まっています。春の野に、桜も咲けば、すみれ 堇も咲く、小さい堇がはたして悪いのでしょうか。名もない草ですら、春の日に不平なしに笑っています。そうできているのが自然です。平和と恵みとよろこびが野原一面のすべての草の上に踊っています。人間にだけ、富や地位でこの自然の大法則が無視されていいものか。それは決して自然の意志ではなくて、人間の無知が造つた、はからいのです。疑惑です。あれを見よ！ 嬰兒を見よ。そのだれに上下があり、疑惑があり、はからいがあるか。

人生評価の尺度を幸福におくか、人格發揮、自己完成におくか、まず沈思黙考して明確に決定すべきです。

求道

私どもは自分の立場がはつきりし、生きていることに価値を感じるようになった時、正しいものの見方を教えられた時、限りなき広い世界が見えてきます。その時、私どもは心のよろこびを感じます。と同時に、私はまたいよいよ光の国への出発点に立っているにすぎないことを思います。それはある種の悲しみです。おそらく私どもは一生涯かかっても親鸞聖人の人格や孔子の人格には及びもつきませぬ。いいえ、年々に私というものがわかればわかるだけ、そうした方がわかればわかるだけ、その間の間隔は遠くなってゆきます。しかし、それは決して悪い事をした後にばれてしまった時のような悲しみではありません。よろこびがあります。聖い世界に住んでいた方を知れば知るだけ、間隔の遠ざかってゆくにかかわらず、よろこびを感じます。悲哀を感じつつよろこびを感じます。それは精進した人だけにわかります。

私はまず、物質や地位や人と人とのいきさつは今のままでいいから、現状のただ中に、今日すぐ求道の旅に出発して下さいとすすめます。求道の旅と言っても家を出よというのではありません。

まず、心を靈界に移すのです。そうして今までほっておいた世界に出発するので

す。

一粒の櫛の実、それを箱の中に入れておいては万年たっても芽をきりません。土の中に埋めてやると、小さい芽をきります。

芽をきれ！ 芽をきれ！

そうしてのびよ！

天までのびよ！

青い空にははてしがない。

おん身の心の芽！

あんまり冬が長すぎる、

光の空へ芽を出せ。

しかし一粒の大豆が芽を出すにも、必ずそこには暖かさと水が必要です。あんまり長い間冷たい世界にさすらっている者は、必ず温かい人情の中で温められねばなりません。あなたにはそれが無いと言うのでしょうか。しかしそれはあなたの考え違いです。いたる所に温かい胸が待っています。不思議な催しが、求める者にだけそれを与えます。得た者にだけその秘密がうなずけます。それは一つには宿善、二つには善知識、三つには光明、……と今しばらく謎のままに残します。

真実の教え

人にして学ばず、教えを聞かねば禽獸に等しい。多くの人は、正しい真実の教えを聞こうとしないで、人生の評価を、その個人的幸福、享樂の上に置こうとします。しかしそれは正しい考え方ではありません。私は釈尊や親鸞聖人によって、大無量寿經のみ教えを聞かしていただくことができました。そして如来本願の広大さ、お慈悲の深さ、金剛不壞の信心の尊さが、ほのかに知られてきました。私には依然としてさまざまな苦しさもつきまっつわりますし、華々しく世間に名をあげるということもできそうにはありません。否、本部のものが、み法に忠実に生き、ただ大法に召されて生きれば生きるほど、悪名はますます世間に流れてゆくようであります。しかしほんとうの教えが心に徹して下さる、出世の本壞、この世に出していただいた者の、ほんとうの願いは満足するのであります。どんな不幸もこの歡喜を滅ぼすことは出来ません。誤解やおとしあなや悪業が、手をもぎ取ることもできましよう、命をとることも、名譽を滅ぼすこともできるでしょう。しかし一切は焼けてなくなっても、真実教がちかつて下さった、如来金剛の本願力が成就して下さった、金剛の真心だけは、ついに何者も滅ぼすことはできません。この金剛の一心が滅ばぬかぎり、私は苦しい中にも、懺悔し感謝して一筋の道を生きぬかしていただくことができます。

あなたをほんとうに救うものは、真実の教であります。如来の本願であります。自暴自棄になつたり、現世祈禱の迷信に走つたりする前に、必ず、如来の救いを求めて出発なさい。いかなる凡夫でも救われ、しかも純粹に人間の垢を入れない宗教は、浄土真宗です。親鸞の宗教です。これだけは確信をもって申し上げます。かつては苦惱の中に泣いた人が、お念仏の中に救われて、今や尊い幸福なる一歩一歩を生きぬいている姿をあまりに多く知るがゆえであります。

人の一生は、その人が領解した教えの深さによって決定します。

仕事に対する態度

一、高慢と無智から出でよ

「私はこんな仕事をしようなんて一度だって考えていなかったのです。」

この言葉が看護婦から出る。事務員、女工、交換手、農村の娘、時には女教員の方からすらこの声を聞きます。私にはこの仕事は低すぎるというのです。わたしはこんなつまらぬ夫の妻になるはずではなかった。こんな家庭であたら一生を反古のように朽ちはてようとは思わなかったというのです。家庭が貧しいのでこんな職業婦人にならねばならなかった。世が世なら、時が時なら、こんな仕事に恥をしのばねばならぬ身の上ではないと言うのです。

しかしそこには、高慢と無智とが暗い世界をつくっているにすぎません。売春婦など一二の例外をのぞいて、いったい職業に高下があるでしょうか。断じて職業に尊卑も高下もありません。そう考えたのは昔のことなのです。社会は複雑な有機体であつて、全ての部分が完全にうごいてのみ社会の活動は続けられてゆきます。もし職業に高下があるように考える思想が残っているなら、私どもの力でその考えを消滅せしめなければなりません。もつと程度の高い仕事なら精も出せるし、明るい気特にもなれるという人があるならば、高慢であります。複雑な、もつと頭のはたらきのいる仕事があなたに出来得るとしても、それだから今の仕事に精が出せなかったり、馬鹿らしいというのは、高慢であります。高慢な人は、時にはつまらないあと特に自分を卑下します。

お嫁入りしたにしても、空漠な空想や自負心がたたつて、長い病の姑の看病をしつつ、こんなことをして若い日を送る気ではなかったと、女学校時代の気分がちよこちよこ出るようでしたら、家庭が平和であつたり、おちつけるはずはないのです。もし理想を言うならば、小学校卒業だけした者よりも、高等女学校を出た方が如何なる場合にも秀れているはずです。金があつたり、家柄が古かつたり、学歴があつたりすれば、肉体的労働は一生しなくてもいい身分であり得る特権でも与えられたと思うのは、日本に於ける大きな考え違いであります。仕事に対する正しい理解といたずらな高慢心を棄てて立てば、もつとしっかりした生き方が生れて来るはずです。そうした生き方がのみこめないならば、どんな世界も、人間界である以上、あなたには永遠に明るい天地はありません。

二、多忙に対する態度

「わたしはあまりに多忙です。一日だって遊ぶ日なんかありません。これでは体だつてたまりません」

為すべきことが与えられて、それを為し得るといふことは、私から見れば幸福の一種であらねばなりません。

もし病身でしたらあなたに仕事を強いる者はありません。仕事を与えられるといふことは、なさねばならぬ使命があるのです。多忙であることは為すべき仕事のないよりは、ずつとまじであります。自分の娘を嫁にやる時、仕事の少ない所を選ぶ親があ

るとするならば、それは我が子の活々とした一生を封じてしまう愚かな親でありませぬ。暇なく回ればこそ谷の水車も凍りませぬ。活々とした人生であつてこそ生甲斐もあります。自覚すれば、働くことは、最上の慰めであり、喜悅であります。

自分の身でこれだけの大多忙が背負いきれるかしらと思われるほどの立場、そこでこそ、弱い態度を出さないで、立ちきり負いきつて行きましよう。それが私自身をつくります。横着を幸福と見る者にとつては多忙は最大不幸かも知れませぬ。けれども、働く事に生甲斐を感じる者にとつては最大の幸福であります。多忙なものには疲弊があります。疲弊は睡眠によつて回復します、怠惰による生命の消耗はついに何ものを以てもとりかえずことは出来ない。温室の花はやがて寒気にしぼむを憶え、しまわれたる鉄は名剣とならず、多忙ならず仕事なき歳月を過すは、床下の草の延びるが如し。多忙を不幸と思う、誤まれるもはななだしいかな。

三、利己主義を捨てよ

「先生、わたしは四年間看護婦を致しました。その間、お金を儲けて妹の学費にしました。そして妹に高等女学校を卒業させました。それなのに妹は結婚してわたしなどは眼中にありませぬ。わたしは今もこうして働いています。わたしはど不幸者ではありません。」

と訴えてくる女がある。

「先生、わたしは小学校の教員をしています。そして月々の俸給が渡ると次から次へと、父の手に渡してしまいます。父は商業の失敗がもとで、山のような負債に苦しんでいます。わたしの渡す俸給くらいは『大海に醤油』のような気がします。渡しても渡しても駄目なのです。わたしは働いても働き甲斐ありません。」

こんな苦しさを訴える人たちがかなり多いようです。私はこの心事はかなり強く理解出来ます。

私は現に七人の弟妹の兄であり、老いた父母を持つて過去十数年間私が中心で生きて来たことを思い至る時、こうした苦衷は、はつきりとのみこめます。私も、かつて俸給の半分乃至三割を父に仕送りました。弟や妹の学資も出して来ました。ですから、こうした苦しみに対しては可なり深い悩みを通つて来ました。

私はこれに対してある実話を語つてゆきましよう。

ある所に先祖代々その地方の金満家として幾代も続いた一家がありました。ところが最近そのうちの若主人が、持つて生まれた才能にまかせて、ブローカーをはじめました。あの山を甲から買つて乙に売り、この土地を買つて、値が出た時に他に売つて、はじめの程は儲けましたが、つい失敗をはじめて、それをとりかえそうとしては失敗、失敗しては、又あせり、ついにたいへんな借金に苦しむ身になりました。借財の苦しみはやがて自暴が手伝つて、酒と女とにその一切を忘れようとしています。一家の平和と幸福は全く失われて、火の出るような苦しさが毎日続きます。両親は水のように流れてゆく山や田地を見て、怒りと涙の日を続けます。正直であつた心は失なわれて今はただ金を得ること以外には眼中になく、如何なる荒々しきにも堪えてゆくようになりしました。

そうした数年間の荒波のただ中に一人の女性が美しくも輝かしく生き切りました。それは若主人の妻であります。三百六十五日、一日として真の笑いのない中に立つて病む^{しゅうと}舅をいたわり、義弟妹の面倒を見、姑を助け、小さい時から労働したことのない、か弱い柳のような体をはげまして、山に行きます、畑にも出ます。男のつけるような身仕度をして、糞尿の始末をするのでした。衣裳は次ぎから次から夫がもって出ます。苦しい家の家計を養蚕によつてたすけます。夫は愛のかわりに、世間からの鬱憤の全部を冷たい鞭として渡します。

一夜をまんじりともせず、泣き明かすことも幾夜か続きます。彼女の必死の活動もついに、大厦の傾くのは何らの力にもなりません。あわれ一家はついに宅地までも人手に渡してしまつて、離散の憂目を見るようになり、彼女はついにこの一家から離れてゆくより外ない身となりました。彼女は敗れてしまつたのです。しかし果して彼女は敗れたのでしょうか。彼女の背後には何時のはどにか見えぬ光がさしていました。彼女がついにその地を去る日、村の人たちは、「ああ、生きたお手本がこの地を去る。」とて皆泣いたのであります。

彼女は彼女が信ずる方から「忍」の一字を与えられました。忍ぶとは、我が情を徒らにおさえて消極的に生きてゆくことではなくて、人間本然の相にかえつて大積極の生き方をするのであります。彼女は不幸の人を見れば「忍びましよう、忍びましよう。」と教えます。貧しくなるにつれて物の尊さが知らされます。一度の食事、一椀の野菜、これも与えられたものとして頂きます。

「わたしなどいくら働いても駄目です。」その声の中にはあまりに根強い利己心が動いてはいまいか、与えましよう、捧げましよう。与えることが私の尊い一生を實現してゆくのであるという所まで、自覚をはり下げましよう。堂々たる男子でありながら、三十近くなるまで親のすねかじりをして生きている者もあります。私も二十歳の年から親の手助けをいたしました。

学校教育も受けられないで、あたら若い日を過したことを昔はあなたの如く悲しみました。しかし、責任を負うて苦しんで行く事が、或は真に人間を作るかも知れませぬ。それは、大きな課題として貴女のみ手に残ります。

四、健康な考え方

第四は、もつと健康なものの考え方をすることです。「わたしはこの仕事は嫌いです。」とて世の中には仕事を變えて走る人があります。もちろん、体質や趣味によつて好き嫌いはあります。しかし女の虚栄心が手伝つたり、骨折りを厭う心から、華な仕事や楽な仕事に走つて行けば、ついに生きる天地はなくなりません。他人の華は美しいと言います。自分の仕事ならば、苦しい所、いやな所だけが見えて来て、他人の仕事はいいところだけ見えてきます。この矛盾を知らないから、他の仕事に変わりたくなるのです。たとえ変わらなしたところで、浮腰でいたのでは十年たつてもその場しのぎです。ひきずられて、他律他動的に年を送つたのでは、進歩も向上もありませぬ。

職業や家業は虚栄の材料ではありません。虚栄の強い人は一生浮ばれません。御主人が何か深いことを考えている傍に来て、「ね貴方、浴衣を一枚買って下さいね。昨年だつて一枚も買っては下さらなかつたじゃありませんか。」と言つたのでは、主人から叱られたり、愛の隔りが出来たりするのが当然です。今着ているものがある間、衣裳の事など一度だつて言はないですむ位には、充実したあなたにならねばだめです。虚栄がふかくなるほど、その世界は嫌になります。

骨折りを厭うことも人間として大きな欠点です。汗びつしよりになりきる所にだけ、地の底からわくような堅実なよろこびがあります。夫の職業を侮辱してはなりません。

育児や、台所働きや、看護やに今日を費していることを馬鹿らしく思つて、心の中では都合の華かさを想像したり、自由な娘時代を追憶したりして、夢や幻のような世界を空想しているようでは、あなたの周囲はそのままが無価値に見え、無意味に見えて暗い現実になつてしまいます。真の自己実現は決して霞や虹の中にはありません。今いる世界にあなたの人格と個性とを美しく実現なさいませ。

五、女性美の保持

第五は女性としての心得であります。

女性は女性なるが故に尊いのであります。女性には、男性の真似は出来ても男性になりきることは出来ませぬ。否、女性が女性らしくなくなつた時は、自分自身の破壊であります。

男性の中で立働いたり、労働をつゞけたりしたために、優雅であるべき女性が破壊されて冷たい中性のようになつた時、あなたの一生は正しい方向をとつてはいませぬ。自尊心と自惚とはちがいます。よく教育者などであつた方が家庭に入った時、妻として母として全然失敗してしまふ方があります。それは一つには女性美のあらゆる点が硬化したり、高慢になつたりしたためであります。女性は永遠に女性であらわばなりません。仕事の上にも職業の上にも女性美が発揮されて行く時、男子の及ばない世界があります。私は女性がもつと開放されて、自由な天地に大胆にはつきり生きていいと思います。決して寵の鳥式な古い世界に女子を封じ込めておけとは考えません。あらゆる天地に手をのぼして女子の世界を建設せねばなりません。けれども、女性が男性になろうとしたり、女性それ自身を失つて男子に勝とうとしたりすればきつと行詰らねばなりません。男性は男性であり女性は女性であるまゝに、いよいよその個性を発揮せねばなりません。

而して女性の真の美は、その教養、その人格より外に成就してはくれません。

愛と女性

一、愛は暗なり光なり

真勇の根底は慈悲であります。我等は勇氣が慈悲の心から流れ出た時のみ、真の勇氣と申します。もし、怒りや無智な大胆や、狂暴性が勇氣の根底であるならば、女性は勇者にはなれませぬ。しかし愛が勇氣の根底であることを知る時、女性もまた勇者であります。愛は時に光であります。愛ゆえに働きます。戦います。忍びます。愛は実に力であります。

「女は弱し、されど母は強し。」

母は慈愛そのものの権化であらねばなりません。母性愛は女性をして実に英雄の如く力強くします。実に女性は地上での美しきものの一つであります。身体も心情も女性は美しく作られています。こまやかなる愛の情緒は女性のみ有する天然の宝であります。

しかしながら、その美しいものには又、一番醜さも潜められていきます。これは解くことの出来ない謎であります。宇宙至高な調和はむしろここに秘められてあるのかも知れませぬ。女性は一番美しいが故に、又一番醜いものであります。仏法の言葉に「外面如菩薩、内心如夜叉」とあります。菩薩と夜叉とは真反対であります。觀世音菩薩と鬼とが一つになって女性を作っているのかも知れませぬ。女性が一度、理智の明を失つて、愛と憎悪に変えた時、菩薩は忽然として鬼に大蛇に変わります。鬼や大蛇は決して光の天地には出て来ませぬ。暗黒の唯中にのたうちかえすのであります。安珍を大蛇となつて鐘の外から巻き殺した清姫や、あるいは予言者ヨハネの生首を求めてその口にキッスするサロメ、あるいは信仰深き嫁を苦しめるため鬼の面をかぶつて竹藪に出た鬼婆等はその例であります。たいがい、男は老年になるだけ柔和な人好になります。女性はどうか見ても、若い方が心がやさしく、年をとるだけ面の皮も厚く言語も野卑に、一切が汚く意地悪くなつて、悪く変つてゆくようであります。

情の修練は女性を高める一番大事なことだと思われれます。

美しき情操の前には一切は生きて来ます。一切は動きます。相や顔すがただけの美は一週間であきがきます。顔を美しくすることに骨を折りつつ、心を美しく磨くことを考えないのは悲しいことあります。それは単に男性の御機嫌をとるためではなくて、女性それ自身を実現するためあります。苦惱の中に立ちつつも暗の中に燈明として生きてゆくあなたでありたい。

二、人生創造と愛

愛なき人生は考えることは出来ません。生きるとは、しよせん愛それ自身であります。

人生は限りなき創造をつづけてゆくことあります。食うこと、住まふことは、それ自身では決して何の意味もありません。生きるとは、こうした肉体的生活の上に限りになき価値を見出し、価値を創造することあります。この価値の創造をはなれては人生は一切無意味であります。価値を創造するとは、人生を熱愛することあります。

す。平気でただ生きるに堪えないで、ほんとうに現実のありたけを抱きしめて、人生に対する深い熱愛を感じることあります。釈尊のように王宮も王位も、父も妻も子も棄て、出家せられたのを見ると人生を捨てたように見えますが、それは皮相な考え方であつて決してそうではないのであります。釈尊にしても、孔子にしても、親鸞聖人にしても、数多の聖者はほんとうに人生を熱愛された方々であります。如何に人生五十年を熱愛されたか、一切の人類の上に熱い涙がそそがれたか、人類に対する熱愛者のみが真に人類の尊い価値を獲得するのであります。

道を熱愛する者が道を得ます。

仏を熱愛する者が仏を得ます。

真理を熱愛する者が真理を得ます。

花を熱愛するものが花を得ます。

伸ばねばなりません。

育たねばなりません。

伸びるとは、育つとは、限りなく人生の価値を創造することあります。言いかえると愛の心の成長であります。

私の心中には、高慢心や、卑下心や、邪見や、憎悪や、貪欲や、愚痴や、懈怠心がひそんでいます。見つめれば見つめるだけ、内省すればするだけ、如何にこれらの価値創造をさまたげる心の深くあるかを見ねばなりません。しかし考えて見れば、そうした暗い悪魔の心根がちつともないのであれば、光もなければ、精進もいらぬ。いえ価値の創造ということすら無意味である。聖者ほど、この暗い心の根強いこと、深いことを痛感せられた。彼らは真に人生の熱愛者であつたが故に、地上の暗と矛盾、不調和にも心をいためたのであります。それがやがて一切人類を救う大信念の生れる源であり、世の光となる根本でありました。私どもは今、智慧の眼を人生に光らせねばなりません。無関心であつた人生を熱愛せねばなりません。

三、自愛

自分自身が火鉢でなくて、どうして、他の人たちの火鉢になれよう。自分自身が光でなくて、どうして、社会の光となれよう。だから我らはただ外にばかり動いていて、他人の世話係としておわつてはなりません。他人を愛すると思つている人はある。けれども自分自身を愛する人が少ない。

何故に自分自身を粗末にするのだろうか。

自分自身の道をもつとはつきり知ろうではないか。

自分自身を救おうではないか。

自分が自分を愛してやらないで誰が自分を愛するのでしょうか。

何でもないことに苦しめてはいないか。何でもないことばかりに困らしてはいないか。地獄の火に自分をなげ入れるのも我である。冷たい水の中に自分を苦しめますのも我である。尊い世界に導くのも我である。他人の世話はするが自分の世話が足りない。もつとはつきり、ほんとうの我を知らう。そしてこの私のためにもつと忠実な下僕しもべにならう。

聖者たちは、自分を見た。あまりに悲しい自分を見た。だからこそ懸命に自分を救いにかかった。自分を自分が棄てていった誰が自分を助けるのか。

四、礼と愛

愛するとは合掌することである。手をつく事である。頭を下げる事である。

支那の孔子は、人の道を「忠恕」だと言い、「仁」だと言いました。そうしてその具性的顕現を「礼」だと申しました。礼とはただ挨拶する時の言葉や儀式や作法のことではありません。

礼は礼讓であります。低い心であります。礼讓をはなれては、忠も、孝も、教育も、政治もなかった。礼讓のない世界には、人の道はなかったのです。

由来、礼とは、身分の低い者が身分の高い者に、子供が親に、弟子が師匠にむかつてだけあるものだと浅薄に考えられています。真の礼はそんなものではなかったのです。

礼は一切万人の道であります。

親が子を育ててやるのだと高くとまっている所には真の親はいませぬ。そんな礼のない親が子供にむかつて孝行を強いつけます。孝行を強いつけている世界には、親子の間を一つにする美しい孝の世界は親によつてふみにじられてあります。決して真の孝道はこの親の前には表われません。親が孝道の蹂躪者だからであります。子供を拝む親、子供の前に手をつけて子供を真に拝むほどの親、子供よりも低い世界にいる親だけが、孝の世界の創造者であります。子供があるために助けられるのは親であります。子供をおいて外に親を生む者はありませぬ。真の子心の上だけに親があるのです。だから親を親にするのは子心であります。親の肉体が子供の肉体を生んだかも知れません。しかし親は決して子を生みません。子供の上に子心が生れて来ない間、親はありません。

だから親を生むものは子供であつて、子供こそ親であります。子供の前に頭を下げる親のみが真に親であります。育ててやるのだ、養つてやるのだ、教えてやるのだという世界には、「礼」はありません。教育者がこの考えをもてば彼は教えをふみにじる教育の反逆者であり、子供を殺すものであります。人を導くことだけにかかわりはて、高慢になりきつて、一世の大善知識になつてしまつた宗教家は自他共に救われない人であります。

礼のない世界は高慢であります。高慢とは、人間が人間を失つて、大地から足をはなしたすがたであります。人間へ復帰するとは礼の世界に帰ることあります。礼の世界にだけ真の愛の世界があります。

礼の世界は愛の世界であつて、人と人とがほんとうの生命の世界にかへつたのであります。礼のない世界では如何なる場合にも征服が行われています。先生が子供を征服しようとしています。母親が子供を征服しようとしています。征服する者も、征服せられる人も、共に傷つきます。愛がないからであります。母親の精神生活が如何に子供の一生を支配するでありましょう。そのことを考える時、私は女性を礼拝したい心さえします。子を持つことは母の特権であります。もしこの特権を棄てて他に自分を

生かそうとする母親があるならば、彼は人生そのものを棄てようとするのでありません。幼なき日、母によつて歌われた子守歌は一生を通じて人の子の心が帰りゆくなつかしき思い出の家郷であります。いい母をおいて、いい子はありませぬ。子供に対して忠実なる母であることは、女性の大なる使命の一つであります。礼のない母の激怒や主我的な圧制は子供の一生を傷つけます。礼あるに似て礼なきは、女性の傾向であります。

礼は窮屈なはからいの世界をつくることでもなく、装いをつくることでもなくて、人間それ自身の世界へと帰つてゆくことでもあります。真愛の世界であります。

苦悩と人生の意義

一、涙の深淵

「人生は苦なり。」とは大聖釈尊の第一絶叫でありました。

それは人生がいわゆる苦だけだとの御言葉ではありません。苦があれば楽があります。苦樂の対立があることが、人生は苦なりと言うことなのであります。龍樹菩薩は「苦の新たなるものを樂という。」と言われてあるようですが、樂とはまことに苦の新たなるものであります。かくて人生は苦にはじまって苦に終ります。世には「人生は樂なり」と言おうとする人がありますが、はたして人生は樂なのでしょうか。人生に苦があるのではなくて、苦そのものが人生であり、生活であります。眼を人生の奥底にひそめる時、そこには無限の涙の深淵がたたえられています。朝に涙の哀史を聞かされます。夕べに苦悩の訴えを聞きます。人間苦のどよめきが、年々深刻になつて聞えて来ます。

ついに人生は苦悩であります。親鸞聖人は「生死の苦海ほとりなし、久しく沈める我等をば……。」と申していられます。

「私には苦悩はありませんと申す人があります。

人生を知らぬ人です。一寸変事に出会つたら破壊されます。

あれほど一切生きとし生ける者が苦闘していても、共鳴を感じない冷淡な人です。

「人生は楽しいのが当然です。」と言う人がある。

それだからこそ、あなたのお顔が曇っているのです。

「人生は苦である。」と見た所に、やがて大樂天も生れて来ます。

二、苦に生きる態度

独生独死独去独來の自覚。「はてしなき広野、後も前も左右共に、人の子一人いない天地にたった一人、西に旅を続けてゆく旅人があった。」それが昔の聖者が見た人生であった。

「たった一人だ。」それはど寂しい人生の見方はない。

親の懐をはなれて嫁入りをします。

打ちとけたようでも姑との間に溝があります。夫の心がわからぬ。家庭の全体が冷たい。子供が出来る。苦しみが増す。時には病気になる。夜半静かに人知れず寂しい涙が頬をつたわる。そうした寂しさを感ずる。「たった一人だ。」しかしこうした寂しさはまだ簡単です。

彼女は一人娘に生まれました。年頃になつた時に婿養子をもらいました。その間に一人男の子が生まれましたが、両親の気に入らないので養子は離縁になりました。そして間もなく、第二の養子が来ました。第一の養子に失敗した両親は、第二の養子を警戒してかかった。「三年たたねば財産は譲れぬ。」と、それが両親の意見であった。養子は三四千円の資本で商業を始めた。彼はその内に遊蕩をはじめて、酒と女に心を乱しはじめた。酒をのんでは夜おそく帰ることのある養子を見て、一家は暗い顔になつた。三年の歳月は流れた。けれども両親は、養子に財を譲ろうとはしなかった。

「あんな様子では、あんな態度がなおるまでは財産は譲れぬ。」と父は言った。養子はそれを見て腹を立てた。そして彼の遊蕩はやまなかつた。両親と養子とは一日として心から打とけたことはない。いやな毎日が流れく／＼て今はもう、先夫の残した息子も二十歳になった。財産はこの二十歳の孫に譲られてしまった。「俺の一生涯にはもう何の光もない。この上は、飲んだり食ったり女を買ったりして楽しんだほどが俺のものだ。」

夫の心はそれだけになった。この天日の曇った一家の中心は真に彼女である。両親は言った。

「なぜお前は、あんな男を離縁する気にならぬのか、親不孝者めが。」

先夫の息子は母を責める。更に夫はおどしつけた。

「離縁するなら離縁せよ。その代りに、どんなことがあつてもびつくりするな。」と酒気をおびた夫はけつこう殺しでもしかねまじき気色である。あるいは又「いつでも出てやる。そのかわり、家を建てよ。財産を何割渡せ。」という。

両親と我が子と夫との間に立つて、彼女はたった一人涙の生活を送ること十数年。「わたしはどうすればいいのです」と泣く。来た嫁なら帰ることも出来る。去ることも逃げることも出来ぬ彼女の身の上。たった一人！

それはただその婦人だけの身の上か。

聖者たちは、その姿を自分の上に見た。

一寸つきつめて考えた時、誰にでもたつた一人であることがわかる。

一人であるから一人なのではない。多数の人たちと一緒にいてもたつた一人だ。

何万と集つた雑沓の中でもこの感じをもつ。

大衆の前に講演する時にもこの寂しさがおしよせる。

こうした自覚の中にいつたい我等は如何に生きるか。

自ら助けよ。「わたしは如何に生きてらいいのか。」それが万人の聞こうとする問題です。

「私を助け、私を救う者は誰なのか。」

まず、そうした問題を提げて考えて見ます。

まず、いちおうは親が私を助けてくれます。兄弟が私を助けてくれます。夫が妻がその他の一切人が私を助けてくれます。

しかし一歩足を社会にふみ出します。父や母の愛の手は私には届きませぬ。失敗するのも私です。成功するのも私です。勝つまけるも私です。壇上に立ちます。天上天下、私を助けるものは私だけです。

かわいい娘が今日を晴れと嫁入します。両親の愛の手はとどきませぬ。勝つまけるも娘を助ける者は娘です。

百メートルのランニングの選手が出発点に立ちます。両親や兄弟が声をからして応援します。しかしそれが彼には本質的な助けではありません。

誰か人生の桧舞台に立ったこの選手でないものがありましたよ。

あなたは、この人生の長い一人旅の世界に立った時、真にその用意をし、決意をして立ったでしょうか。

「天は自ら助くる者を助く。」とは名高い金言であります。嫌でも好きでも、寂しくても悲しくても、私を最後に助ける者は我であることを知りつくさねばなりません。いたずらに泣いていても何にもなりません。

身の上や他人を呪ったり、責めたりしていたとて何にもなりません。

金儲け、病気、禍福、家運、方角等を、神々に祈祷したって何にもなりません。昭和の今日でもまだ、日の吉凶を言ったり、運命を神に祈ったりしている者さえあります。

出発しましょう。とにかく、黙って出発しましょう。坐っていたはずらに論じていたとて何にもなりません。

我は我を助けるために出発するのです。

親に言えば意見は言ってくれます。兄弟に語れば同情はしてくれます。援助もしてくれます。けれども、歩むのはあなたです。努力するのはあなたです。知るのもあなたです。楽しむのも苦しむのも一切あなたです。親も兄弟もそして何人も、あなた自身になりきることは出来ませぬ。

あなたの親の意志では、あなたを鬼熊の親にするか、孟子の母にするかを決定することは出来ませぬ。

立つて帯をしめましょう。

その呪いの言葉をとじましょう。

人生に犠牲ということは如何なる場合にもありません。

たった一人立つのです。八方ふさがったような中に立つのです。

あなたはあなた自身でなくてはなりません。

三、苦か楽か

楽を追うか、苦に突入するか。

それには、はつきりとした断案があります。議論ぬきに信じてあなたの心の自由な働きにまかせて実際に生かすのです。

「苦を逃避せず、享樂によつてゴマ化さず、神に祈祷せず、自ら苦を背負つて起ち上るのです。」

人生を楽しむ所だと定めて、楽しみを追うて走る人の一生涯にはどこかで行き詰りがあります。毎日浮かぬ顔して、嫌な犬に綱をつけて引かれてゆくように、常に眼に見えぬ暗い力にひかれます。苦しうに強いられつつ生きてゆかねばなりません。

「さあどんな苦なりと来い。」と苦を受けてゆきます。かく人生の方向転換が出来たならば、どんな世界が開いて来るかは、出発した者だけにわかつてきます。

如何なる人間苦も、あなた以上のもは出て来ませぬ。しつかりした足どりで生きてゆけば、「どんな苦しみだつて来い。」と乗りこえられます。

「この暑いのに行かれるものか。」と言います、出て見るのです。さほど暑いことはありません。大儀なと思えば、飯を食うのさへ大儀になります。頭が悪い、体がだるい、今日は寒い、今日は暑いと言つて、横着になれば、ついに今日と言つて、はつきりした日はありません。精進すべき日はありません。

無限の苦が大波小波待っています。

数万トンの軍艦が堂々波浪をけつて進むように、真一文字に進みます。禍や苦は、やがて転じて福となり、楽となります。苦の中に立つてゆく時だけ、真のよろこびは得られます。

四、尊きものの生れる素材

至つてよきものは、至つて悪きものより生れて来ます。よきものはあしきものより生れて来ます。忠臣蔵の大石内蔵之助その他四十七士は、吉良上野介の貪慾、浅野長矩の短慮等のあしきものが生んだのであり、楠公は、足利尊氏が生んだのであります。

親鸞、日蓮等の聖者は、戦乱に乱れた鎌倉時代、法燈の光うすれて、伽藍仏教、名と権勢横暴に墮落した鎌倉時代、このいとうべき、暗黒世界の底に流れる日本の本願が生み出したのです。

国乱れて忠臣出で、家貧しゆうして孝子出づとは、こうした相を言ったものです。釈尊の出世には仏敵提婆がついています。過去世物語を見ても、釈尊の出られた所には提婆が必ず一緒に出ます。釈尊から提婆は出て来ませんけれども、提婆から釈尊が生れて来ます。ですから釈尊は、提婆の恩を知つて、善知識だと言つておられます。更に提婆がやがて成仏すべきことさえ言つていられます。

大地の上は永遠に浄土にはなりません。無限の悪と苦がわだかまります。しかしながら悪と苦はそれがそれでおわるならばいけないことだけれど、悪や苦がやがて美しいもの、よきものを生み出す素材になった時、若や悪は生きて来ます。

日本が生きているとは、苦しい状態に出会わぬことでも、悪人が出ないことでもありません。永遠に苦しい状態にも出会えば、悪人も出て来ます。けれどもその反動として、美しきもの、よきものを生み出すか否かが問題であります。新しいゴム毯はたつきつければとびあがります。日本が偉大であるか否かは、あしきものを素材として飛躍し得るか否かで決まる問題です。

苦しい境遇に立つているあなたがたは考えねばなりません。生きるか死ぬるかは、その苦しい状態の中に、如何なる美しいものを創造するかが問題です。

家庭が乱脈になる。

その中をじつと注目します。

誰もその中に光として立つてくれるものはないのでしょうか。

「天の将に大任を此の人に下さんとする。先づその心を苦しめ、その筋骨を勞せしめむ。」とか。

苦を抱いた人、それは宝石を抱いているのです。

苦悩においては外に、何物の尊いものも生れない。

あなたの現状を憶う。
難関又難関、苦悩又苦悩。

もしそれにまければ、苦はあなたを殺します。

しかし苦の唯中に立つて、不断に勝ちつづけるならば、苦はやがてその人を宝玉に
してしまいます。

苦を生かさぬ偉人もなければ聖者もありません。家が貧しければ、その貧の中に立
ちましょう。

呪いや憎しみばかりに立つたら、その中に立ちあがりましょう。
乱れた社会のただ中にはつきり立ちましょう。

あなたは女性です。女性だつて時には男性にまざります。

晴黒の潮流がその時代を流れ、国家を流れ、家庭を流れる時、その底には生きた大
生命が、至純に清浄に流れます。その清き大生命が、救世主や善人や先駆者を生み出
します。その大生命の流れも本願力と申しておきましょう。本願の流れを見出し、そ
の生命の流れに棹さすことが道であります。真に生きるとは実にこの本願を発見し
て、本願を生活し、本願に立上ることであります。

苦を抱きしめて立つ時、その力はあなたの上に動きます。

外ばかり見て、いたずらに泣いていたり、ひがんでいたり、追われていないで、苦
を生かすために、はつきりと生きかえりましょう。

五、苦悩と人生の意義

生きていることに尊い意義を見出すか、生きることは無意味なことだと見るかは、
その人々の勝手です。

しかしすでに生きています。生きている以上は、その処に何物かを生み出さずには
いられぬのが人生です。

「女性」この名をもつていることを悲しむ人もあるでしょう。あるいは女性であるこ
とを喜んでいる人もあるでしょう。かつて私は数十百人について、

「あなたは女性であることをよろこびますか。」と聞いて見たことがあります。する
とその大部分の人たちは、女性であることを呪わないまでも、女性であることを好ん
ではいませぬ。

女性であることをよろこばぬ原因については、もつと深く人間のつくつた習慣や制
度の上に欠陥があることを観察しなければなりません。しかし花が花であること、草
が草であること、男が男であること、女が女であることを好まず嫌悪した世界がはた
して明るいでしょうか、女性は女性であることを讚美し、感謝し得る所まで、女性を
たかめ、自己をたかめ、新しい人生を創造せねばなりません。それは現代日本の女性
の一大急務であります。ただいわゆるモダンガールのように断髪して洋装している
のみであつたり、普選を女性にまで及ぶように運動することのみでは、決して女性は
たかまつたものではありません。

話をもとへもどします。すでに生れて来た以上は、我らは、そこへ必ず意義を発見
しなければなりません。

食ふことや性欲がそれだけでおわるのは動物の世界です。その事実の上に、更に価値を見出し、創造するのが人生生活であると申しておきました。

真理と言ひ、価値と言ひ、或は当為というも、すべて人生に見出される光であり、生命であります。

芸術(美)と言ひ、道徳(善)と言ひ、哲学(真)と言ひ、宗教(聖)と言ふも、一切は人間によつて創造されてゆく価値の生活であります。

人生の創造とは限りなき生命の世界に棹さしてゆくことでもあります。

人生にもし苦がないとしませば地上は実につまらぬ所であり、生甲斐のない所でもあります。生甲斐があるのはただ苦があるからであります。

なぜならば、苦がないならば、人間の真創な問題はなくなりません。さきに申した価値はあり得ないので。苦がなければ、歌もありません。詩もありません。劇もなければ、文字もありません。道徳もなければ、もちろん宗教もありません、仏も神もありません。聖者もありません。悪人もありません。人生の色彩の一切がありません。血あり涙あつてこそ、そこに千種万様の輝しい色彩いろどろがあります。苦は実に生きた人生を生み出すたつた一つの根本的原因です。

人生の意義は実にこの苦あるがためであります。ですから苦は実に尊きものを生み出す母体であります。

いたずらに泣いていないで、この難度海を悠々と渡る大船の上に、私を見出さねばなりません。

私は一言つけ加えます。親鸞聖人は彼の信仰を告白された御本典の総序の冠頭に、「竊におもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり。」

と申されました。難思の弘誓とは、無始無終にわたつて流れたまう如来の大願力であります。一切群生のたましいのすくわれてゆく力であります。船であります。この如来の真実の大願こそ、わたるに苦しき海を度らせたまふ大船であるとの仰せであります。

救われねばなりません。一日も早く信仰に目覚めねばなりません。信仰の世界に生れ出でた時、苦悩はついに無限の感謝に融合せられて、苦が単なる苦でなくなるのです。苦は一切の価値を生む根源であります。あなたの心に光のおとづれる日、苦をかかえて、永遠の微笑があなたを占領します。

女性と修養

一、口と修養

女性は男性よりも言葉が概して多いようであり、一体言葉が少いものがおり、言葉の多いものがあり、中位のものもあるので、よくつりあつて面白いと思います。もし世の中に同じような者がそろつていたら面白くはないのでありますが、それぞれに變つている所に面白があります。要は唯それを生かすかどうかと云うことが問題であります。ですから女性だとして、皆が言葉が多いということではない。中にはだまり屋もいるのですけれど、一体に女子はよくしゃべります。しゃべつてもいいから、その中に何が流れているかが問題であります。

「口は禍の門」と言います。人の肺腑をえぐるようなとげのある言葉を出して、相手の短所をつくのは女性に多いようであります。先日何かの書物の中に世の中の悪党がありました。一体悪党は、相手の長所をぐつと握ります。そしてその人の過去の痛手をつかみます。

長所をにぎるのは、褒めあげられたら誰でも得意になるといふ人の性質につけこんで、褒めあげて御機嫌をとるためであります。ほめて御機嫌をとつて、相手を有頂天にしておいて、今度は相手の痛手にちよこくさわるのです。そうして相手から金でも取りあげるので、随分考えたやりかたです。

相手の痛手にさわることは、小人のして見たいことでもあります。それは心の寛いやりかたではありません。しかし人には、相手の痛手にふれて相手を苦しめることを痛快に思う卑しい心があります。女性にはかなりこうした心の濃い人が多いようですから注意しなければなりません。相手のそうしなければならなかつた境遇も知らずに、古傷にさわることは、どれほど人の心を殺すか知れないのであります。

仏も十悪の中に、多弁をかぞえてはいませぬ。多弁は必ずしも悪ではありません。もちろん、言葉の少いには越したことはありません。

人の心をさす毒舌を悪口と言います。悪口ほどその人の価値を下げるものはありません。悪口は相手を下げたり上げたりする力はありません。唯言つた者の価値は必ず下ります。

如何に人々の口から責任のない悪口が出ることだらう。

もしその悪口が牛分に減じたら、三分の一、十分の一に減じたら、如何にこの世界が住みよくなるだらうか。

卑怯な者は、表では綺語かざりごとを言つて裏で悪口を言います。向つて言えない位であるならば、裏でも言わないことです。

我が言う言葉に注意しよう。何が出ているか。

口は我等の心を表わす唯一の機関です。

頭の中に何かあるかわからない。

胸の中に何が秘めてあるかわからない。

それが口から出る。

あなたの美しい口から菩薩のような言葉が出ると、

其の言葉が聞いている人の心を明るくする。

その小さい口が、何に使われる。

悪魔の使いか。

仏のかおりか。

天上からながれ出た言葉でないなら、だまっていた方がいい。

その言葉の裏に何ほどの権威がある。

絶対界に根ざさぬ言葉なら、千言万語を費しても何にもならぬ。

生きた一言なら、時に世界の人心の中にひびきこむ。

そうしてそれが人類の永久の目標となり、

豊かな心の糧となる。

朝から晩まで、おゝ、その口が一体何に使われる。

剣のような毒舌が、嫁の心に致命傷を与える。

爆裂弾のような野卑な罵倒が、子供の一生を永久に葬る。

何でもないような一言、それがそれはど大きな力をもっているのか。

嫁の悪口を隣の人たちに言っている姑がある。

この人に嫁をやらねばよかつたと思う。

女子はその大部分が、言葉をかざる。

「巧言令色、鮮し仁矣」。

しかし美しい人の心を生かすような生きた言葉と、綺語とは、永遠にその本質を異にする。

舌の根に美しい愛情がおどる。それが美しい言葉となる。

一口聞いても誠意がわかる。

聞いた人がよろこぶ。その心から明るい世界が開いて来る。

心にわだかまりがなかつたら、その言葉にもわだかまりがない。

一寸は飾つてもそれが通る。しかし少ししたてば、その裏が見える。裏が見えたら飾りだけが嫌になる。

二、嫉妬心

嫉妬は女性のもっているわるい心である。

夫を嫉妬する妻の心は、我と我が心を燃やしつくす炎である。

相手が成功すれば嫉妬する。隣が富めば嫉妬する。友人が栄えたら嫉妬する。

卑しい心である。

一度この心がきざす時、一切善根功德をつきやぶって地獄の底におちてしまう。

寛かな心になりたい。嫉妬の心の微塵もない、ひろい心の持主になりたい。

女子と小人は度しがたしという。

隣の田の稲の出来を見ても腹が立つ、

お友達の半襟を見てさえ、淋しく思う。

堂々たる男子でも、一度この心に囚われた時、彼は卑しい小人である。

早くつみとれ、嫉妬の心。

あなたの心の平和を奪う最大悪魔。

一切の善の根を亡ぼすバチルスである。

嫉妬する時に限って、相手だけが悪く見える。

早くつみとれ、この心。

早く消せ、嫉妬の炎。

もし消し得なければ、この心をいだいて求道せよ。

あゝ過去の聖者、この心を抱いて泣いた人ありやなしや。

三、狭い心

大きな心の前には大きな世界が開かれる。

小さい心の前にはせまい牢屋のような世界があらわれる。

一切をゆるす心、

一切をいだく心、

その心の前にだけ悪人も生きられ、弱い者も生きられる。

太陽の前に万物が輝くように、寛やかな静かな心の前に、人々の心は、ゆるやかに

ゆたかに、平和にほほえむ。

子供がちよつと過失する。口やかましく叱りつける。

夜あそびに出て少しおそくかえる。遊蕩児にでもなつたようにきびしく言う、

嫁が茶碗一つこわすと、目にかどをつけて小言を言う。

自分の住む世界が狭いのは、決して周囲の者が狭くするのではない。自分自身が造るのだ。

一日か二日か一緒にいたら、その人の住む世界の大きさがわかる。

一人の老婦人がありました。その方が腹を立てたのを見たことがない。何時もに

こにこして態度も言葉もおおらかである。子供が世間から非難されるとその婦人は、

「心配しなさんな、その内には、ほんとのことが皆にわかる。」

と言ったきりで、どんなことが起つても老女の世界をさまたげない。

其の子供が本当に遊蕩におちた時、静かに注意はしたが、責めはしない。

世間の人が、この子の悪評を聞かせても、「はい有難う御座います。」とそれだけである。

「この位のごとは世間にはありがちなことだ、何も心配することはない。」

この婦人の前を何物も碍げない。言つてもよい時が来た時に、やめよと言わずに道を

教えます。大きな心だとて、とりはなして放つていいるのではありません。大きな愛ほ

ど細心である。が、条件が少ない。こうして婦人の道がふさがらぬように、やがて

は、この周囲がだんだんのびのびと育つて来ました。

女の心は大概せまい。

愛があつても慈悲がない。

熱情があつても智慧がない。

ひろい心を持たないならば、その熱い愛だつて人を殺す。

狭い心は苦しみを生む。

狭い心を「囚^{とらわれ}」と言う。何についてせまくても「囚われ」である。見て字の如く、「囚」の字は、□の中に人が入れている。心がせまい、かこひに入れられる。□が小さいほど心が苦しい。この□を別の名でよべば、我と言うのだ。

我が私を苦しめる。我以外に私を苦しめる何物もない。

妻としての女性

女性が普通の道を行けば妻となる。

享楽気分ならば妻とならぬがいい。

妻になることは新しい苦への行進であるかも知れぬ。

しかし享楽は人生の本義ではない。自分自身を実現するためには苦の中にも幸福がある。

娘時代は花時である。花が男性の家に移される。決して昔のように女を奴隷の如く考えてはならない。奴隷の如く甘んじてはならない。妻は妻であつて人形ではない。イプセンの「人形の家」の思想は女性に大きなショックを与えた。

現代婦人は、何処かにノラの血を持っている。人形は他によつて生かされたので、自分を持たぬ。

しかし人格尊重をはきちがえて、もし女性が女性を失つて、妻が妻でなくなる時、それはあなた自身の破滅です。妻は永遂に妻であつて、夫ではない。体質がちがひ、心がちがう。如何に世の中が進んでも妻である事は永遠に女性の恥辱ではない。

玉経を開いて積尊に聞こう。玉耶は嫁して婦の道を守らず、怠惰に、嬌慢に暮して、一家の人たちを苦しめた。彼女はある日、積尊の御出でによつてねんごろに女の道を聞かされた。その中に七婦の説がある。

一、母婦

母のような妻である。夫を愛念し昼夜忘れず、常に左右に侍して倦み疲れることなく、朝夕の飲食をば心を尽くして供養し、四時の衣服は意を用いて供給し、夫が人のために軽んじられはしないかとそれを恐れること、まるで母が子を憶ふようにする妻である。夫が強い男性であつたらいりもすまい。しかし相手によつてはあなたは母のような立場に立たねばならぬかも知らぬ。夫が駄目だからと言つて捨ててかえる婦人がある。それでは夫婦は立身が第一条件か。

二、妹婦

夫に事えて誠敬をつくす様は兄弟に對することく、血をわけた者さえかなわぬ真情がこもる。疎んじたり、隔てたりする心が微塵もない。

妹婦になれといつても、甘えておれというのではない。夫が悪戦苦闘する日もある。妹のようにそれを扶ける。あの夫婦は兄妹だろうか。飾らずいつわらぬままに夫婦の間に敬愛と、苦のただ中にも樂園をつくる。

三、師婦

夫に事へてただ恋々として相遠ざけることが出来ない。夫が道をあやまりそうな時、灰かに諷し諫めて、其の缺行をないように心がけ、善言嘉謀をばひそかに誨えて、

夫の成功をたすけ、過を改めて善に遷らし、暗を去り、明につかしめること、丁度、師が弟子を導くにも似ている。

四、友婦

夫に事ふるに愛敬を以てし、己を修むるに節義を以てし、口に過の言葉なく、身にも過のなきことを心がけ、善は推して夫にゆずり、過は進んで自分が受け、義理をおかず、退きて礼を失わず、常に和して相助くることは、まるで親友の如くするを友婦という。

五、婢婦

心常に慎み畏れて、あえて夫と争わず、はやく起きおそく臥して、如何に忠をつくすも猶足らず、謙遜に身をもつて放逸の行なく、口は柔軟に、あらましの言葉なく、如何に寵愛を受けても驕らず、愛を失うとも怨む念いなく、むちうたれても怒らず、辱しめらるるとも甘んじて恨みず、苦楽、榮辱によつて心を二様にしない。これが婢婦である。

夫の人格や学徳はあまりにも高い。自分の至らないことが見える。婢のような態度で仕える。こうした妻も尊い生活である。

六、怨婦

夫を見れば心よろこばず、相對すれば、鬪諍して更に畏れはゞからず、昼夜瞋恚の心をいだいて恒に離別しようと思い、夫婦生活はまるで寄寓の如く、生業を務めず、子供を見ることが他人の如く、養育しようともせず、心は放埒で、身は淫蕩、親を辱め、夫を汚す、夫が呵責すれば則ち呪つて死ねかしと念う。こうした婦を怨婦と言う。

こうまで揃つた女もあるまい。しかしこの怨婦の血が一滴もはたしてないであらふか。

七、賊婦

晝も夜も毒心をもつて夫をつけねらい、つくづく思うには、如何なる方法によつて夫と離別しようか。どんな手段をとれば夫の財産を奪うことが出来ようかと考え、終には間夫とはかつて、隙をうかがつて殺させ、夫が死んだ時、財産を奪つて他の男の妻となる。こうした女を毒婦というのである。

昭和の今日でも時にこうした女がある。私はただ女子の修養のみをいうのではない。怨婦があれば怨夫がある。毒婦があれば毒夫がある。女が悪いことが男が悪くていいという口実にはならぬ。男が悪いからとて女が道を守らなくてもいいという理はない。

夫婦生活はこれ地上の社会国家の根源である。自由恋愛とか結婚の改善とかいうも、要は、より美しい人生を建設しようとするのではないか。特別の事情ある女性は独身もゆるさねばならぬ。しかし常道が結婚にあることを思う時、妻としての失敗は時に人生そのものの失敗である。

母としての女性

一、乳

女性の胎内に嬰兒あかじがやどる時、女性の乳房に乳が出来る。そして生れ出でたみどりこの口にこの乳がそゝがれます。何という神秘でしょうか。

白い温い乳が、何も知らぬ赤子の口から体に吸われて若い生命が内から育つてゆく。

女のみ許されたほまれです。女のみが持ち得る特権です。母そのものが乳となるけれども、乳は子供のものなのです。

母は：：乳に：：乳は：：子供に。ですから母が子供になるのです。

活きた事実です。

空漠な官万言の言葉よりも活きた事実が尊いのです。

女性としての美は花の美です。散つてはかなき美であります。

しかし母としての女性は永遠です。

女性は女性であつて、断じて母ではありません。しかし母は必ず女性です。母であることは女性の最高の光榮であり特権です。

嬰兒が無心に乳にさわっている処、そこは眞の平和と人生の美しいあらゆる生活の摇篮であります。

我等が無意識の世界には、この乳をくわえた日の一分がかくされておるに違いな31
い。

乳の日の母は実に我等の全部でありました。

幾多の聖者は皆、この嬰兒の世界にかえつたのです。苦惱と荒んだ現実の底に嬰兒の日の一切を見出したのです。そこに純情があり、素直さがあり、温かさ、平和と、報恩があります。

幼き日に、母の乳房の温かさを知らなかつた人の子の一生が如何に暗い涙の多いものであるかを知る時に、子供に仕える母を拝みたい心さへする。

二、子守歌

『ねんねんよ

おころりよ

坊やはよい子だ

ねんねしな

まだ夜は明けぬ

よい夢見つつ

よい子ぞ泣くなよ

ねんねんよ……』

母を憶う時、子守歌をおもう。

田園の夕べに素朴な子守歌が、街の夜中に哀調をおびた子守歌が、東洋にも西洋にも、人の子の母の口から子守歌が聞える。

子守歌を聞く時、母の慈愛と、愛の忍従を憶う。

子守歌……それは実に母の慈愛のシンボルであります。

『泣く子よ。母はここにあり、安らかに眠れかし。』

それこそ切々たる慈母の祈りである。泣く子故に悩む親心である。母と子の美しい一生はこの子守歌の延長にすぎぬ。

慈愛をおいてどこに親があらう。

『女は弱し。されど母は強し。』

何故に母が強いのだらう。力は唯、慈愛から生れる。

力とは苦を忍従しのぶことである。

子故に忍ぶ母親を、私はあまりに知りすぎる。

夫が不品行、不身持になつても去り得ないで、愛なき家庭に、痩せ衰えて、涙の忍従を続けるのも子故であつた。

『幾度も婚家をぬけ出でて、実家にかえらうと思つたか知れないが、この子故に辛抱いたしました。』

長い間には若い嫁が、意地悪い姑に虐げられたり、夫の愛なき仕打ちに堪えかねて、一切を棄て、逃げ出そうとする時があるかも知れない。

そこに強い力がひきとめた。子故に……涙の哀史が綴られる。

母よ、私は切言します。あなたが愛子を棄てて、どこに真に生きる世界がある。育ててやつて下さい。忍んで下さい。迷わないで下さい。

子を棄てて、他の男性の愛に走つたり、一時の怒りで、心を鬼にして、義理で動いたりした時に子どもの一生は、どうなるのです。貴方の心に、人間としての純な気持ちが蘇る日に、貴女が棄てた子供の追憶が、あなたを暗くすることはあまりにも明瞭です。

32

早く夫に死に別れて、二十代の若い身空で、子供のために独身を通す婦人がある。多くの男性は、四五十になつても妻が死ねば後づれを持つ、二度結婚するのが悪いと言うのではない。

しかし、二十三十の若い女が夫のわすれがたみである愛子を抱いて、一生独身を通す母には無条件でお礼を申します。人生に於ける美しい事実の一つです。

貴女の美しい愛の忍従は、一生かくれて世の中に表われぬかも知れぬ。しかし、かくれたる捨て石としての貴女の一生は、表われる表われぬということによつて、永遠に価値が左右されるはずがありません。

眞実の生き方は名誉心を棄てた所にある。

あなたが一個の捨て石として皺しわがれた日、そこには、あなたの愛子が、あなた自身の延長として立っている。

三、継母

地上の悲しい事実の一つとして継母と継子のいたましい家庭苦が作られる。

私は継母に同情します。

継子に同情します。

まゝ母が生さぬ仲の子供をいじめ、子供がまま母の仕打ちを呪うという嫌な出来事は、可なりたくさん聞かされもし、見ても来ました。

時と場合によればあなたが継母にならねばならぬこともあるでしょう。あるいは継母を持たねばならぬかも知れませぬ。

それはさげ難き地上の事実であります。

血の続いているものを續いているように、飾ることも出来ねば、そう思うことも出来ませぬ。さればその間を永遠に美しく暮し得ないものでしょうか。私は信じます。

お互の間に深い理解と、愛が働くならば決して悪くばかりなるはずはありません。仮にも縁あつて「はは」と呼び、「子」と呼ぶのです。

真に知ることは愛することです。相手の一切を知りつくし、その立場を理解しつづいた時、そこには『母親なき不幸の子』がふるえているのです。

それに同情し、それを愛してやらねばおれぬ心がわいた時、もうこの問題は解決したのです。

ある地方に講演にまいりました。ある奥様が度々私の所に来て、中学五年になるお子様のことについて色々と言われます。

「子供が信仰に心をむけてくれて嬉しい。」とか、今頃は休暇で帰っていて、今日は講演を聞きに来たとか。ある時は、これが広島市から送った手紙だとか、大変にお子様のことを心配し、「信仰に入れてやらねば、この有難い世界の味を知らせてやらねば、」と時には眼に涙さえ浮べて色々と言われます。

私は初めは実の母子だと思っていました。所がその間は生きぬ仲であつたのです。ある時です。そのお子様が心臓病にかかつて家に寝たり起きたりしていました。奥様はわざわざ私を家庭に招いて、「信仰上不審な点を聞かしてやってくれ。」と云われます。私は心から奥様の心根に感心しつつ、参つてその病む青年と数時間お話をしました。その時です。奥様はわが事のように泣いて喜びつつ語られました。

「先生、私は誠にお恥しいことではありますが、数年前まで、この子があることが、嫌で嫌でまことにつらく当っていました。」

その頃の私はまことに鬼でありました。ところがあれを御覧下さい。あの山に見える墓は、私の実の娘の墓ですが、あの娘が亡くなりました。あの娘を失つて悲しくて寂しくてたまらぬ私は遂に今一度あの子に会いたいというのが動機で、如来のみ救ひに気づかしてもらいました。如来のみ光の前に一切をなげ出した時、あゝ私は鬼だつたのです。地獄一定の大罪人だつたのです。私ほどの悪人はなかつたのです。その大悪人が救はれるとは、何という有難いことなのでしょう。それ以来この子に対して誠にすまぬことばかりしていたことに気づかせられてまいりました。

それでせめては、この如来の救済を、この子にも知らせてやつたらと、そればかり思いつづけていました。今日は何とも申しようありません。有難うございます。」とて泣きつつ、過去を物語られたのを聞いている時、私は真の親子の間ですら、これほどまでに純化されていないのもあることを思いつつ、尊い生きた御説法を受けて真に感謝しました。

信仰による懺悔の態度は、悲しい地上の業のもつれをそのままに浄化せられたのです。

継母根性はにくむべき心です。私どもがきらうのは、生きぬ仲という事実でなくて「まます母らしい女」です。

世の中には生みの子に対してすら、まます母らしい女があります。母としてのやさしさも奉仕もなく、高あがりした、慳貪邪見な鬼のような女があります。子供の運命を虐げ、虚栄と、横暴と、高慢との鬼のような心に反省も懺悔もなく、ただ頭から高飛車に孝行を我が子に強いている女があります。それらはたとえ、血は続いていても、真の母ではなくて、まます母らしい女であります。

私はまます母らしい女をすきませぬ。「孝の世界」を破壊する者は、子よりもまず、かかる親なのであります。

四、自覚

あなたが如何につまらぬ女と自ら思つても、あなたの膝にもたれて「母様」とよぶ子供のためには、あなたはかけがないの尊い母なのです。その子のためにあなたの価値は絶対です。

如何なる英雄も、聖者も、それは女が生みました。

無自覚に生んで無自覚に育てることは動物でも致します。私が要求するのは目覚めたる母なのです。

子供のためには三度居所を変えた孟子の母、南朝の大忠臣楠正成の妻としてその子をして父の意志を全うせしめた正行の母、世の名聞栄達に墮落しようとした我子を誠め、三十年愛執をたちきつて面会せず、ついに不朽の大聖者たらしめた、横川の源信和尚の母の如く、目覚めた母の前だけに、目覚めた子供があります。

かくして母は子供に子供たれよと求める前に、母として不断に自分を培わなくてはなりません。

目覚めたる母が、国家社会をよりよく建設する母体であります。ですから我らは、一切の問題の出発点を目覚めたる母に求めます。

信仰生活の提唱

現実

ある方の母について書かれたものを読んでいますと、世界の聖者・偉人・天才のほとんど大部分が、とても優れた母をその母に持つていることが語られていました。これはまことに事実でありましょう。優生学上の諸条件が極めて通常に具っており、その上よい母によつて育てられるほどの幸はあり得ません。

まことに全ての子が世にも優れた賢母を持ち、全ての母が後世に名を残すような子を持つことが出来れば問題はありますが、大地の現実はその裏切つて、大部分の母は平凡であり、時には平凡を通り越して愚かであり、劣悪であり、更に時には極悪であります。子供の多くもまた平凡であり、更に愚者であり、時には悪逆非道、病弱であります。

賢母に天才児、それはもとより求めらるべきことでありますが、しかしその千人に一人の恵まれた人のことよりも、我等の問題は、平凡以下の我等の悲しい現実の事実の問題であります。鬼か悪魔か、恐るべき毒婦を母に持つて、あたらし生を台なしに蹂躪ふみにじられて、暗い運命を抱いて泣いている子の涙も知っておりません。一生の努力をただ愛子の上に注ぎながら、その子が平凡以下であったり、病弱であったり、あるいは全く墮落の淵に沈んでしまつたりして、一生涙の乾きやまぬ母の訴えも聞きすぎました。

堂々たる男性の妻となつて一生幸福に過してゆきたいのは全ての女性の希望であり、若き日の美しき願ひであります。だが人生の現実はその許しません。病弱な夫、才能のない夫、教養のない野卑な男、放蕩兄、短気我慢な暴君、女の腐つたような意気地なし等々、大部分の女は全て若き日の期待を裏切られて、灰色の中に子どもを生んで、ただ生存を続けてゆく。

真実の夫婦は、必ず異体同心の愛に結ばれて生くべきであります。様々な事情が愛のない夫婦を作ります、別れることも出来ず、不満足のまま一生を過ぎゆく人もかなりあります。

世には「あなた百までわしや九十九まで、共に白髪の生えるまで」と偕老同穴の契もこまやかに、長生きした人もありますが、三十にも足らぬ若い身空で未亡人になり、子供をつれて赤手空拳、人生の荒波の中を苦闘しつづけている人もあります。

あるいは又、不具廃人になつた夫や、病床に横たわっている夫のために、生活戦線に進出している人もあります。

数えあげてゆけば限りのない悲しい現実の種々相の中に、人生の明るい希望も願ひも消えはてて、哀れ人生の敗残者として消えてゆく多くの不幸の人は、一体どうすればいいのでしょうか。

果して敗残者であるか

ここに三十五歳にして夫に死なれ、三人の子供をつれて奮闘し、長男が二十一歳になつた時、肺結核で倒れ、長女は二十歳の時、恋で走り、更に火事に出会つて丸焼け

になった婦人がありました。「私は人生の敗残者です。」婦人の眉の間には、暗い深い幾条かの皺が刻まれています。

私どもは、この至る所にくり返されるであろう所の事実をつかんで、考えて見たいと思います。人生の大海の大波小波は、はかり知ることの出来ない様々な波乱を描いて、永遠につきる日はありません。「生死の苦海ほとりなし」との親鸞聖人の断案はついに何をもつても打ち消すことが出来ません。今は幸福の頂きにいる人も、何時、人生苦の谷底に転落しなければならぬかも知れません。私どもは一体どんなに考えたらいいのでしょうか。

一、私は冷たい氷のような心になつてこんなことを考えて見ます。

人生は算盤そろばんで割り切れない処なのである。ここには一生を幸福に暮してゆく人もあり、一生を不幸に泣いてゆく人があり、前半生を不幸に後半生を幸福に、あるいは前半生を幸福に後半生を不幸におわる人があり、一生たいした波なく生きてゆく人、身分の高い人で泣いている人、身分が低い人で泣いている人、金があつて苦しむ者、無くて苦しむ人、あつて笑う人、何人かの博士に脈をとられて至れり尽くせりの特等の治療で若死する人もあれば、医者には二里も行かねば診察さえしてもらえない田舎でも、八十九まで生きる人、善人で不幸な人、悪人ではびこる者、悪人で亡ぶ者、善人で栄える者、大震災は地震博士にすら予告せずして来り、世界的大不景気の波が来てから世界の巨頭が経済会議を開き、人間が不作を嘆こうが雨が七月一ぱい降りつづけ、時には農林大臣が米価下落に困ろうが、全国中が豊年満作、物が多く生産されればされるほど民衆が買えなくなるような皮肉、これが嫌でもおうでも人生の真相であります。よい悪いをぬきにして、これが人生であり、当然おきることがおきているのです。そこで私はまずはつきりと、人生の生甲斐、人生の意義は、こうした波乱矛盾に満ちた人生の相なるが故に生れてくるのであることを、断言しておきます。

二、私どもは先にあげたような婦人に心から同情いたします。色々な不幸が一身に集つて人間的な幸福のほとんど全てが失われたことに真に心から同情いたします。けれども一面、私はこうした意味から、それは、しかし、その方の生き方によつて決して無意味ではなかつたと言つてもいいと思います。それは「大地の真相はこうなのだ」と人生の深さを認識された点であります。我らはしばしば「人生は享樂である」という考えを頭から持つて出発し、享樂した部分だけが私の人生における収獲であるように思う間違いをくり返します。真に知るべきことを知る、酔いも辛いも知りつくすことも、人間の出来る重要な要素であります。されば「我に七難八苦を与えたまえ」と祈つた人さえあると言います。

三、温室のような幸福の中で笑つた笑いは、決して真の笑いではなかつたのです。不幸のどん底に立ち上つて、その中に見出された微笑こそ、真の力によつて生れた光である。この不幸な御婦人が、この中に光を見出されて更生された時、必ず真の人生の光となり、多くの不幸の人の母となられることを信じます。

四、暗さが深ければ深いだけ、それを真の明るさにするためには、より深い光と力を要します。その光と力とを得られた時、不幸に比例して真の歓喜を得られるでありましょう。

人生の真の歓喜は、富と、名利と、権勢と、地位と、享樂とを生命にしている人には与えられないからであります。真人生を計る尺度は全く別のところにあるからであります。たとえ、刀折れ矢つきで哀れ人生の敗残者よ、と見える方にでも、必ず人生勝利の凱歌は許されなくてはなりません。しかししてその鍵を握るものが即ち宗教であります。

宗教生活の風光

親鸞聖人の宗教はいわゆる他力本願の宗教であります。苦、無常、罪惡等に苦しんでいる煩惱の衆生の上に、大樂、常住、清淨なる如来の本願力が活躍して、その絶対無限の力に生かされる大信心の世界であります。その金剛不壞の大信心は、如来の本願力そのものの顕現でありますから、他力本願の宗教だと申すのであります。しからば、その如来本願の宗教は我らの上にかなる救いの事実を成就するのであります。うか。

一、「その第一は「法悦の安住」であります。

過去に対する後悔と、未来に対する不安とを取り去られ、全我を如来の御はからいに乗托して、一切を投げ出し、まかせきつた生活であります。

親鸞聖人は、

「慶ばしい哉。心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。」

と言ひ、又

「大願海のうちには煩惱の波こそなかりけれ、

弘誓の船に乗りぬれば、大悲の風にまかせたり。」

「慈光はるかにかふらしめひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたまふ 大安慰を帰命せよ。」

と歌嘆していられます。大安慰とは如来のことであります。如来の智慧光、慈悲光に照らされる時、真実の法喜を感じ、安らかさと慰めを得るのであります。まことに大信心においてのみ、法悦を、その法悦の中に安住の境地を見出すのであります。解脱、超越は如来大悲に安住する所に恵まれます。

二、次は、人生の意義の発見であります。

天地の間に存在するものは一木一草といえども、無意味無価値なものは存在せぬはずであります。しかるに、人は常に我が生活を無意味なものと感じます。歡樂の極にも悲哀があると申しますが、不幸や禍が続ぎ、失敗不平後悔などが押し寄せますと、三原山の御神火へでも走りたくなります。しかし、私どもが、人生を敬虔に考え、苦悩や矛盾の意味を見出しますと、宿命から使命へ、絶望から希望へ、愚痴からよろこ

びへ、と転じてゆきます。失われた意味、私の生存や、人生の現実の意味を発見するのが宗教であると言えます。つくった罪悪でも、つきせぬ苦悩でも、それが一度大信念のうちにとかされます時、それが持つ意味がはつきりします。

キリストの教えの中に、ある盲目の人に対して「この人が盲であるのは、親の因果のためでありますか、又は、この人の罪の報いでありますか。」と問うたのに答えて、「親の因果のためでも、罪の報いでもなく、実に神のみ栄えのあらわれんがためである。」と教えられたと聞きます。いかに多くの盲人がこのキリストの言葉によつて救われたことでありましょう。これキリストが盲目の上に意味を与えたのであります。誰にでも、その人でなくてはできないものがあり、役割があります。釈尊はいかなる愚人にも悪逆にも、人生の意味を法を通してお恵みになりました。もしこの人生の意義を忘れて暮すならば、単なる生存で一生をおわるでありましょう。

三、第三は、力の獲得であります。

信は力なりと申します。親鸞聖人は、

「念仏者は無碍の一道なり。」

と喝破されました。一切のものが障碍することが出来ない大道であります。如来の本願力……すでに力であります。よく人生の苦悩の中に生きる力を恵まれます。これを又「忍力」とも申します。忍ぶということは、まことに勝れた徳であることを釈尊は何時もお説きになりました。大地で生きようとすれば、絶対に「忍」の徳なくしては生きられません。その人が重要な位置に立てば立つほど、忍の徳なくしてはその位置におれないようになっていくのが人生であります。苦の中で生きる態度はただ、この忍の一字につきまします。古来の聖者等、その御一生を拝すれば、忍力成就の一生であります。大聖釈尊こそ、その第一人者であります。精進努力の半面は忍であります。忍のない生涯とは、精進のない生涯のことです。

四、第四は、感謝の生活であります。

釈尊ほど物を尊ばれた方はありません。それはものの中に存在する絶対価値を見とどけられたからであります。「米一粒の重き須弥山よりも重し。」反口紙一枚をおし頂かれた聖者もあれば、菜つ葉一枚が流れ失せたのを追いかけた方もあります。如来の智慧が衆生の眼になりますと、今まで見えなかつた世界が見えてきます。物質が恵まれた分量に比例して感謝の心がわくと思つたらまちがいであります。飽くことなき貪欲心だけありますと、いかに金殿玉楼もお不足であり、智慧の眼が打ち開けば、荒屋あほらやも時に瑠璃の御殿にまざります。信仰生活の態度は、一切に感謝してゆく生活態度であります。時には、非難攻撃、憤怒の人にすら感謝せずにはいられません。ましてや、如来の大慈悲に感謝の思いなくしてすみましようか。感謝の念は、直ちに報謝の念であり、生活であります。でありますから、聖人は和讃の巻頭に

「弥陀の名号となへつつ 信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして 仏恩報ずるおもひあり」

と高く掲げられました。報じても／＼報じつくせぬ所に信仰生活の真面目があり、真実の創造生活があります。よろこびがあります。権利義務でも末が通らず、腰かけでは実が入らず、請け負いでは手がぬぎたくなり、商売では儲けに眼がくらみ、逃げ腰では死んでおります。しよせん、恩に感じて我の全てを捧げ投げ出した時のみ、生きております。ここに至つてのみ、生活は真のよろこびとなります。

五。第五は転悪成善であり、転禍成楽であります。

いづれの宗教でも罪悪消滅を説かないものはありませんが、仏教でもまた罪障消滅を救済と言うのであります。その消滅について二つの意味があります。一つは、消滅とは無くすることである。即ち小乗の考え方であります。今一つは、消滅とは「転ずる」ということで、大乘仏教の考え方であります。転ずるとは「罪を善に転じかえなす」ということ、無くするのでなくて、罪悪さながら煩惱そのままが、善に徳に転ずるのであります。これ大乘の至極において沙汰されることであります。

「罪障功德の体となる 水と水のごとくにて

こほりおほきに水おほしきはりおほきに徳おほし」

この御和讃など、最もよくこの世界を現わされてあります。

人は罪悪なくしては生きられませぬ。過去、現在、未来にわたつて因果の繩に縛られて、罪悪の中に苦しんでいます。しかるに如来金剛の信力は、この三世の罪悪に聖火と燃えて、悪を転じて徳とし、善とするのであります。

「渋柿のしぶこそよけれ、そのまゝに、変らで変る味の甘さよ。」

水を水に転ずるものを熱と言ひ、糞を土に転ずるのが土であり、大海は衆悪の万川をそのままのんで清浄である如く、如来は衆生の煩惱を転じて仏とするのであります。罪悪は罪悪によつて亡びず、水は水によつてとけない。罪悪に泣く人間はただ如来によつて聖化さるべきであります。

更に聖人は

「弥陀の願船に乗じて 光明の広海に浮びぬれば、

至徳の風静かにして 衆禍の波転ず。」

と断言されました。ただに罪悪を転ずるのみならず、すべての禍を感謝に法悦に懺悔に転ずるのであります。

私は大正十二年に一生の住み家と定めていた飯室の地を逃げねばならなくなりました。その時の騒動と言つたらまことに大変なことであり、私の苦難もまた、私の歴史としては特筆すべきものであります。私の一生の運命がくると向きを変えるほど打ちのめされた時は一本参りましたが、今日において考えますと、私が至る所で多くの勝友を恵まれて、まことに有難い生活をさせていただき、光明団の仕事も多少出てきましたのは、全くあの事件のおかげで、その時の主役となつて活躍して下さった方は、誰にも勝る一生かけての大恩人でありました。一生に二度とは無いような禍が、今日の幸福のもとになっております。みな善知識であり、如来の光明を輝きあらしめる善巧であります。聖人の御一生の如きは、禍から禍であります。あの苦悩の中に生いたつた信念なるが故に千古に輝くのであります。

私は多くの同胞たちが人間苦に悲泣していられることを知っています。しかし苦を真に生かし、禍を転じて大楽の風光を知らしめるものは、ただ宗教的信念であることを明確にお示しして、金剛不壊の大信念に住せられんことをお奨めするのであります。

女性と宗教

以上私の書きましたことはあまりに苦悩に対する生き方ばかりであつたようでありませぬけれども、宗教はただ苦悩に対してそれを超克してゆく力を与えるばかりではありません。私が私として真に生きてゆく道を与えられる所に真の宗教があるのであります。

私どもが私自身を真に知るといふことは、難しいと言えど至難なことはありません。じつと眼をつぶつて私自身へ帰つてゆく。「人が悪い人が悪い。」と言つて人を責めている時、何時しか一番悪いのは私であつたりします。

人間が他の動物より優れている点の一つに、この自己内省の世界があります。ですから動物ばなれのした文化人であればあるだけ、すぐれた人であればあるだけ、自己内省の深い人であります。

女性は男性よりもやさしく、特に感情において繊細であります。さらに体、顔、声色まで全てやさしく出来ています。けれども美しいものにはその裏に必ず醜いもの、おそろべきものが潜ませてあります。悪鬼のような心相、人の腸をえぐるような言動も女性において特に著しく見えるようであります。ですから「外面如菩薩 内心如夜叉」という言葉は女性に使われて来ました。もし女性がこの夜叉の如き内心の悪性を仏智の光によつて突き止めて、その上にそそがれる大慈悲の心に生きるならば、女性をはじめて女性本来の尊さを發揮するでありませぬ。そしてその女性の優しさが、よき妻として、母として、更に社会人として、人類の上に光あらしめる存在となりませぬ。宗教は徹底的に自身を知らしめないではおきませぬ。

感情は時に美しい。しかし感情は時に醜い。もし感情の背後に、明るい智慧の光、理性の眼がみ開かれてあるならば、感情は美しい春の花園をつくります。しかしもし感情がただ、その盲目的な流れのままに放たれてある時、恐るべき自滅の淵に自らを誘ひ、他の多くの人たちを殺します。愛もまた然りであります。愛は時に光であり、愛は時に暗であります。理性の光つていない、内省懺悔のない、なんら高められない愛は決して人生の光ではなくて、暗であります。女性は感情的だと言われます。そのこと自身は決して善でも悪でもありませんが、その感情の内奥には、常に光つているものがなくてはなりません。それは信念の光であり、明るい宗教的理性であり、智慧の眼であります。宗教的信念は智慧光そのものであります。

女性は人類の半分である以上、そして女性は弱いようでも、結局、柔よく剛を制するものである以上、男性を背後から動かしつつ、人類全体の上に大きなものを成就し、あるいは破壊してゆきます。もし以上申し上げたような生活者でない時、女性は夫の重荷となり、家庭の癌となり、社会の暗の中心となりませぬ。

さらに女性の欠点は確固不動の意志の失われ易いことでもあります。自らの意志、強い底面を持った意志によつて自ら導かないで、ただその場の感情に流されてゆく時、待っているものは底知れぬ暗であります。自らの意志に立ちあがつて歩むのでなければ、貴女の一生はついに救われる時はないであります。宗教は我らに金剛不壊の大信念を成就いたします。この金剛の大信念に安住して、自らを感情の混乱から救い、強い意志によつて自ら立ちあがつて歩む所のみ、道は開けるのであります。

我らは至る所に、以上申しあげたような、真の宗教的生活三昧に入つて生きぬいて
いる女性を知っています。私は多くの女性が、觀世音菩薩の示現のような聖容をもつて社会に光つて下さらんことを切念して、ペンをおくものであります。